
Full moonlight

不知火仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F u l l m o o n l i g h t

【Nコード】

N 8 3 8 1 C

【作者名】

不知火仁

【あらすじ】

とある事情で魔法の存在を知った蒼夜は、ある事件をきっかけに『ミッドチルダ地上本部』に入隊して世界の人々の為に役立とうと考える。そうしてミッドチルダにやってきた蒼夜達が創る、『St r i k e r S』から6年後の物語。（本編からは6年後、エピローグからは5年後になるかと）

読者への注意・警告（必読。以前読んだ人も）（前書き）

ここに書かれている注意書きや設定はちよくちよく変更していくので、毎回目を通してもらえるとありがたいです。

読者への注意・警告（必読。以前読んだ人も）

注意・警告（ってこれ同じ意味だよな？）

以前ここに書いてあった注意書きを読んだ方へ。ゴメンナサイ（土下座）

この作品は『魔法少女リリカルなのはStrikerS』の世界を基にした二次小説（FF）の皮を被ったほぼ完璧オリジナル小説です。故に版權キャラ（三期までの公式キャラ）のほとんどはサブキャラとして1、2話、ぐらいしか出ません。ギリギリメインキャラとして2、3人数えられるぐらいです。ですので白い方や金色の方達の活躍が見たかった人は諦めて下さいごめんなさい。

そして誠に残念な事に、この小説には“魔法少女”なるものはほとんど存在しません。よくて小学生○○○○とその友達程度です。あらかじめご了承ください。（○○の中は本編から来た方達なら分かるかもしれません）

前述したとおり、この話はほぼオリジナル設定でスタートしています。そしてどうやら自分の書く小説は、オリジナル二次関係なく最初の数話は初見の方には分かりにくい構造となってるらしいです。ですから本編見て無くてもこの小説読む分には同じですよというか……なのはを知らなくても読んでみてくださいますの淡い希望？ あ、それでも分からない人はきつというでしょうから、後に一話丸ごと使って大まかな説明を入れてみます。どう入れるかはお楽しみみてことで。

最後に。実際自分は『StrikerS』しか見ていません。世界設定も自分で調べたりしていますが公式ではない為やや曖昧です。だから自分で勝手に脳内補正♪ 微妙なところは適当につじつま合わせてます。

こんな状況で書いている理由はただ一つ、『やりたいからやった』。それだけです。です。ので何かおかしいところがある場合は『ここがこういう風になっているのは変です。こういう風にしたいほうがいいですよ』と優しく教えてくれるか、『ここまでひどいならやめた方がいいです』と厳しく批判してくれれば幸い(?)です。もしそういうコメが多ければ削除も辞さない覚悟です。それに他の連載小説も書かなきゃいけないし。ああ、馬鹿だ俺。

それでも出すのは『主人公が男なのは系統がやりたいから』なのと、『もし出すなら四期決定しない内に出さないとやばいな』と思ったからです。うん、それだけ。ミもフタもねー作者でホントすみません。以上。

――ついでに補強――

自分の世界設定はs t s本編、サウンドステージ01～04、マング版一卷までのを参考にしています。それ以降に発売されたものにはもう関わらないようにしています。だからその後で何か新しい設定が加わっても関係ナッシング！ その設定が偶然こっちに当てはまっていたらラッキー！ ……程度に考えましょう。



この小説における新システム（＋設定）

ごめんなさい、以前書いてた大方の設定はボツりました。ですから消えた設定に期待していた方には肩透かしをさせていただきました。ホントにスイマセン。

☆デバイスの言語表記

ミッドチルダ式デバイスの言語（英語）なら《》、ベルカ式デバ

イスの言語（ドイツ語）なら【】で表記します。技名や簡易的な受け答え（了解（例えば《Sir》）や主を呼ぶ時（例えば《Boss》）など）は英語やドイツ語で書きますが、それ以外は上記の方向で。……いやほら、自分日本人ですし。（余計な事言えば実はハーフなんだけど）

☆入隊試験について

自分入隊試験がどんな物なのか知らないんでオリジナル試験内容で行かせて貰います。

以上が今の所の説明可能な項目です。他のものに関しては物語が進むにつれて明らかになってくるでしょう。（何故かRPGゲーム風に）

こない加減な作者ですが、出来るだけ細長い、軽蔑するならせめて生暖かい目で、遠巻きに（心の）距離を置くならせめて半径1km以内で見守っててください。

プロローグ

俺はまたあの夢を見る。それは遠い記憶。冷たく濡れた、満月の夜だった。

「――ゴメン」

その夢では俺達以外に人はいない。いつも俺と共に戦う少女も、いつも俺の剣となる少女も。ここにいるのは、紅く染まった腕の俺と、紅く染まった胸の少女。

「――ゴメン」

俺は無意味な言葉を傍らの少女にかける。それは本当に無意味なのに、俺にはそれ以外の言葉が思いつかなかった。

「――ゴメン」

自分の胸が痛い。まるで心が流れていくようで、勿論ただの比喩だ。

「――ゴメン」

少女の胸が痛そうだ。それは命が零れるようで、勿論ただの真実だった。

「……泣かないで」

少女が俺の頬に触れる。それはただの雨なのに。俺は一滴も零し

てはいないのに。

「……ありがとう」

そう言って彼女は力無く微笑む。どうしてこの状況で笑って感謝できるのか、俺は理解できるのに納得していなかった。

「——ゴメン」

少女はもう手遅れだ。今更足掻いたところで無駄で、そもそもさっきまでの俺はそんなつもりで彼女と向き合っていなかった。彼女に抱いていたのは、ただただ純粹な——

「——ゴメン」

そうして俺はまた同じ言葉を繰り返す。まるで壊れた人形おもちゃ。そんなガラクタが世界を救おうだなんて、全く馬鹿げてる。

「……そういえばまだ、言っていなかったよね」

少女はうわ言のように呟く。多分彼女には、もう俺の声など聞こえていないのだろう。まるで残った熱を吐き出すように、——それこそ文字通り命を懸けて、少女は言葉を必死に紡ぐ。

「………大好き、だよ」

それが、彼女が望んだ言葉だった。視力も聴力も指を動かす力も——呼吸する力も全部注ぎ込んで、それは懸命に俺に繋げた言葉だった。

——その言葉が、そこから逃げ出そうとする俺の心を繋ぎ止め

る。

「――――」

……そんなの、前から知っていた。お前は分かり易すぎる。せめてもう少しうまく隠すか、もっと堂々と語ってくれた方が楽だったのに。だけとお前は、いつもその事を表に出そうとはしなかった。……ホントにバカだ。想いなんてものは伝えないと始まらない。この関係を壊したくない、このままで十分幸せだなんて、そんなのは勇気の無い奴の言い訳だ。

……でも、そんなお前が言った。残り少ない時間を投げ売って、お前は最後の最後に、誰よりも早くその言葉を口にしたんだ。……ホントに早すぎる。それはいつか、俺が先に――

「――俺も、言っていなかったな」

……だから次は俺の番だ。お前が一番を取ったなら、俺が二番に収まってやる。……お前の隣は、誰にも譲りはしない。

「――俺も、お前のことが――」

俺はその先を言おうと必死で口を動かす。だが言葉が出ない。俺の口が、思うように動かない。

――俺の頭は回らないのに。理解まわしたくないのに。……俺の体が、既にその事実を認めている。

「……う…か、く……あ……あ……あっ」

言葉の代わりに俺の口から漏れたのは嗚咽。それは彼女への懺悔であり、己を恨む呪いだった。……もう誰も、彼女の二番となりにはなれない。

——満月は既に見えず、時雨が俺達を濡らす。俺は掠れた目のまま天を仰ぎ、大切な者を殺めた手が、消え逝く温もりを抱いていた。

プロローグ（後書き）

やっときさ本編（だがしかしプロローグのみ）投稿。だがこっち書く為にもう一つの方が書いていないと言う事実。……やばい。

第一話

「……………」
俺は無言で^{まぶた}瞼を上げる。目の前には、見慣れない天井。

「……………」
体を起こす。そこはあるホテルの一室の、人生初体験のベッドの上。別に変な意味じゃない。昨日まで俺は布団で寝ていて、ベッドで寝るのは初めてだった。それだけの話。……いや、意味が分からないならそれでいいのだが。

「……………」
上半身を支える手元を見る。俺の横には、いつもと違って可愛いとも思えなくも無い安らかな寝顔。……別に変な意味じゃない。とあるバカが、ホテルに男女二人組をシングルベッド一つの部屋一室と予約した。それだけの話。だから二人とも服だってちゃんと着ている。……寝相が悪いのか掛け布団は下に落ち、こっそり下着がはみ出しているのは見なかったことにしておこう。

「……………」
ベッドから降り洗面所へ向かう。……さっき見た夢の所為か二度寝する気にもなれず、そもそも昨日のようにノリで女性の隣で寝るのは色々とマズい気がした。

洗面所の鏡に映った俺の顔は寝癖で髪が撥^はねており、まだ眠たそうな顔をしている。……そして目元には、うっすらと一筋の跡が残っていた。

「……………ぷはっ」
洗面器に水を張り、そのまま顔を沈める。再び顔を上げてタオルで水を拭いた時には、寝癖も眠気も、一筋の”痕^{あと}”も消え去っていた。

洗面所で着替えを終えた俺は部屋の端から端まである横長のカーテンを一気に開いた。窓の外から眩しい太陽（だと思う）の光が差し込む。ここまで陽が昇っているということは、既に十時は過ぎた頃かもしれない。……寝過ぎたか。

俺は窓から外を眺める。ホテルの周りには近代的な高層ビルが建ち並び、無数の窓が太陽を反射して眩しい。眼下にはカッコいいフォルムの車が縦横無尽に道路を駆け、その道路の端をビーズのような色とりどりの小さな粒ひとの集まりがひしひしとうごめいていた。ホントにこの景色には舌を巻く。ここまで近代的で綺麗な造形は俺の”星”せかいの首都なんかとは比べ物にならない。

俺達が居るこの部屋は、五十階ほどもある最高級ホテルの四十九階スイートルームという、そんじょそらの金持ちでもさらさら手出しが出来ない部屋に宿泊していた。何故あのバカがこんな超高級ホテルの超高級スイートルームに昨日の昼に連絡してその日の夜に予約が取れたのかは知らないしさらさら興味も無いが、まあ感謝ぐらいは……する気も起きない。ここまですが限界なのかただのバカなのか（まあ後者は確実だが）、結局この一室しか借りなかったんだから。その所為で昨日はこいつとアホみたいな事で争っちゃったし。

そんなことを思い耽りながら昨日のケンカ相手の方を見る。振り返るとちようどそいつはベッドの上で身じろぎをしてこっちを向き、

「——う、…ん。……ちょっと、眩しいわよ」

と、今更ながら太陽の光で目を覚ました。この部屋は窓に寄り添うようにベッドが置いてあり、更に高い場所に部屋があるため日光が直に降り注ぐのだ。

少女はだるそうに体を起こす。いつものサラサラで綺麗なストリートトの黒髪が、今はもみくちゃになっていて見る影も無かった。

「いつまで寝てるつもりだ。そろそろ起きて下にいかないと朝飯食えなくなるぞ」

このホテルの朝食時間は十一時までだ。それまでに一階の食堂に行って注文を取らないと、最悪外でファーストフードである。せっかくあの煤霧^{バカ}が取ってくれた最高級ホテルだ。その最高級ホテルの最高級料理を口にしないというのは、些^{ちや}か勿体無過ぎる。

「――あー、うん、そうね。分かった」

どうやら同じ見解に至ったらしい少女はベッドから立ち上がり大きく伸びをする。そしてそのままジーンズのホックに手を掛け――

「――って、いきなり着替え始めてんじゃねー！――！！」

いつも通りの恥じらいの無さをいつも通りツツコむ俺だった。

第二話

朝食を終えた十一時過ぎ。食堂から戻った俺達は、食休みを兼ねた休憩をとっていた。

ホントにこのホテルは凄い。食堂は広く煌びやか。従業員の行動は滑らかで隙が無く、まるで本物の召使い。並べられた料理は素人でも分かるほどの一級品で、しかも頼めばいくらでも料理を持ってくるという逆バイキング。セルフサービスなんてクソ食らえと言わんばかりの徹底ぶりだった。無論そんな料理店なんて初めてだった為、食事中は気の休む時は無かった。満腹感より疲労感が上回る。

「おいしかったあゝ。出来ればまた食べに行きたいわよねゝ」

……だというのに、何故コイツはあそこまで気兼ね無く常人の域を凌駕するのだろうか。

「……なあ、飛鳥^{あすか}。今度からああいうところで飯を食う時は、せめて”ゆっくり”食ってくれないか？ 周りに他人がいるときは、特に」

俺はベッドの上で大の字になって寝転がる飛鳥を睨む。すると飛鳥は寝返りを打つようにベッドの隣に置いてあるイスに腰掛けた俺の方を向き、不思議そうに訊いてきた。

「何で？ 蒼夜^{そうや}だって結構食べてたじゃない。あの量を食べきるなんて普通の人じゃ歩く事も出来なくなるわよ？」

「俺が言ってるのは”量”じゃなくて”速さ”を言ってるのであって、しかも俺は”普通の人よりよく食べる”程度で、決してお前みたいな質量保存を無視した食い方はしていない！！！」

「そう？ あれぐらい普通いけない？」

「できねえよ！ どこの世界に自分の二倍の高さまで食器を積み重ねられる人間がいるんだよ！？」

「そりゃいるんじゃない？ どんな皿であれバランスを考えれば10mは超えられるわよ」

「そういう話をしてるんじゃない！ 俺は人として全世界の学者が

求めた人間の構造を真っ向から否定する事はやめろと――」

「……うるさいぞ、蒼夜」

と、俺が全ての学者の叫びを代弁していると、その叫びで目を覚ましたらしい小女がのっそりと部屋から出てきた。クセツ毛で大変の事になってる金髪を引きずりながら、そいつはまだ眠気眼の半目で俺を睨んだ。その迫力に負けて俺は小女に謝る。

「おう、すまん。……あー、まあとりあえずおはよう、満月^{みつぎ}」

「もうお昼だけだね。ホントに満月は朝が弱いわよね」

まあな、と気だるそうに答えた満月は、時計を見て何かに気付いたかのように小さく叫んだ。頭だけを軽く俺達に向けて、訊ねる。

「……蒼夜。もう、朝食は食べたのか？」

「「……………あ」」

一瞬向けられた失望の目に俺達は胸を抉られる。……いや、忘れてた訳じゃないんだ。ただ時間が無かったというかなんというか。といういい訳を、俺は胸底に埋める。

満月は食費こそかからないがよく食べる。というより、食事というものが大好きである。そんな彼女を置いて二人だけで朝食（しかも高級、さらにバイキング）を食べに行ってしまった俺達には、弁明する余地など無い。ならば諦めて満月の希望を――

「じ、じゃあ今日はまずどっかで飯食う場所探しましょうか！　ちようどもうすぐお昼ご飯の時間だしね！」

「……だというのに、どうしてこうお前はそう逃げに回るかね」

俺は横目で飛鳥を睨む。飛鳥の言ったセリフでは、こちらが朝食を食べたという所は明確になっていない。さらに昼食の話を持ち出して、朝食から論点をずらすようにしていた。……なんか、かなりせこいと思うぞ。

満月は無言。しばらくの間俺達を交互に見つめ（及び睨んで）いたが、やがてゆっくりと溜め息を吐き、

「……分かった。準備に少し時間がかかるから、その間蒼夜達はゆっくり食休みでもしている」

重たそうな金色の長髪を引きずって満月は洗面所に向かう。その後姿を見ながら、俺は頑張って美味しい飯所を探そうと心に決めた。



「ありがとうございますー！」

自動ドアが開くと同時に、明るく元気な店員の声が背中を押す。その声を聞きながら、俺はものすごく申し訳ない気持ちになった。

「……ホントにゴメンな、こんなの場所しか見つからなくて」

俺は隣で食事をする満月に謝る。ホントに面目ない。ホテルを出て30分、散々歩き回った俺達はホテル前大通りにあるそれなりに大きなファーストフード店、何か俺達の世界でも見た事あるようなバーガーショップでテイクアウトを頼んでいた。初めて歩く近未来的都会街は、俺にとっては異世界でしかなかった。……まあぶっちゃけ異世界だが。

それでもやはりやるせない気分の俺に、満月は訝しげに答えた。

「ん？ いや、私はこれで十分満足だぞ。やはりどの世界でもフィレオフィッシュはうまいな」

そういう満月は本当に美味しそうにフィレオバーガーを頬張る。そこに嘘は微塵も感じず、なんだか少し自分に自信が持てた。

満月は確かに食事が大好きだ。それは高いだの貧相だのに関わらず、その食事の過程を楽しむ事が好きなのだそうだ。誰かと一緒に、同じ食事をするという行為が。

——食事が一番、誰かとの繋がりを感じられる。……こういうのを、“団欒”と言うのかな。

ふといつかの言葉を思い出す。それは多分大事な言葉なのだろうが、……まあ今の俺達には関係無い事だろう。今の満月が”それがいい”と笑っている。なら、俺はそれで構わない。

「……つーかさ、なんで小一時間前にたらふく朝飯食ったお前は軽くトリプルバーガーセットが食えるんだ？」

「だっておいしいじゃない」

「……………」

的確に入れたはずのツツコミを当たり前のように跳ね返す暴食女は、さも当たり前のように肉の塊が三段に重なったバーガーを平らげる。次いで持っていた紙袋からポテトを3本取り出し、それは何故かリスのようにちまちまと食いだした。何だそれは。何かのポリシーか？

「そんなことより問題は次の目的地ね。今日のところは暇だから、予定は蒼夜に任せるけど」

人間の行動心理の奥深さについて考えていた俺は、そんなどうでもいい事を放り出して何となく朝から考えていた案を提示する。

「飛鳥が構わないって言うなら俺は明日の試験会場に行ってみたいんだが。とりあえず俺は他に行きたい場所なんてないし、そもそもミッドに何が在るのかも分からないからな」

あの煤霧^{バカ}はホテルから会場は近いと言っていた。という事は多分、ホテルからでも歩いて行ける距離なのだろう。

飛鳥は少し考えるような仕草をしてから、了承するように頷いた。「賛成。今のうち道順確認しとけば当日迷って遅刻するってことも無いだろうし、ついでにこの街も見学して大体の地理も知っておきましょ。満月、試験会場はここから近いの？」

飛鳥は持っていたポテトを口に放り込み満月に訊く。満月の方は飛鳥と打って変わって今だフイレオと格闘中だった。

「ん……むぐ、ああ。この道を真っ直ぐ行くと大きな通りに出るから、そこを左折して1・3km程歩けば着く」

言われた通りに真っ直ぐ進む一気に視界が開ける。大通りの向こう側にはビルはおろか建物一つ無く、ただただ碧い海岸線が広がっていた。

「ホント綺麗なことだよな。俺達の世界と違って、ごちゃごちゃし

てないし汚れてもいない。なんか、方向性は違えどホントに幻想世界に來たみたいだ」

「そうね。でも私達の世界だって悪くは無いじゃない。ここと、そこまで変わらないと思うけど」

「バカ。んなもん分かってるさ。俺は別に地球を貶してるわけじゃない。あっちにだって良い所があって、あそこにしかない物だってある。俺はあの世界の自分の町が好きだ。ただよ、純粹に汚いところなんてどこにも無い綺麗な世界っていいなーって憧れたただけだ。ここがどうかはまだ分からないけどな」

その海に沿うように伸びる道を歩きながら、俺は飛鳥に言う。それは感嘆によって漏れた本心の声。嘘も偽りも無く、ただ凄いと感じたものに対する賞賛の言葉。……それなのに、

「……………」

飛鳥は何も応えず、俯いたまま黙ってしまった。

「? どうしたよ?」

「……なんでも無いわよ」

それだけ言って飛鳥は歩を速めたので、しょうがなく俺はそのスピードに合わせた。……俺、変なこと言ったかな?

「——はむ、ほうや。そうやふいはふおついたぞ」

口の中にフィレオを含みながら言う満月のその声に俺達は足を止める。目をやったそこは大きな跡地。海に面したその場所は以前大火災によって崩れて閉鎖された空港跡だと、ここに来る前に煤霧が教えてくれた話だ。

俺達が受ける”入隊試験”はここで行われるらしいが、それでも当日ではない今日はこんな跡地に人が来る事は無いと思っていた。

——だから、この光景に素直に驚いた。

「……なんか、思ったより賑やかだな」

「そうね。何かあるのかしら?」

空港跡地前には大勢の人ばかり。それは跡地内にまで及んでいて、まるで大きなパレードが行われるような人数だった。いや、ここに

いる人たちのほとんどは緊張している者や意気込んでいる者達ばかり。その緊迫した様はパレードなどではなく――。

「――っあああああああああ！！！」

唐突に聞こえた絶叫。その声に驚き俺達は声のした方を振り返る、いや、正確には見上げた。

――青い空には小さな点。その点は見る見る大きくなり、同時にその点が発しているらしい叫び声も次第に近付いてくる。

「……あれ、人ですかね」

いつの間にか飛鳥の隣に移動していた満月は、やっぱりまだ食べきっていないフィレオを口にしながら気にした風も無く言う。

「うん、女の子みたいね」

とっくの昔に自分のを食べ終えていた飛鳥は、満月が食べているフィレオの端っこを千切り分けて貰いながら言う。貴様はまだ食べ足りないのか。

「……ホント、お前ら呑気だなあ」

人の事を言えない抑揚の無い声で呟きながら、俺達は空からこっちに真っ直ぐ突っ込んでくる少女を眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8381c/>

Full moonlight

2010年10月10日07時22分発行